
ゼロの使い魔 ~ 一騎当神 ~

昭栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜一騎当神〜

【Nコード】

N0441Y

【作者名】

昭栄

【あらすじ】

属性ゼロ、魔法の成功率ゼロ、近年まれにみる魔法劣等生、ゼロのルイズ。そんな彼女が呼び出したのは、異世界で邪神とまで呼ばれた男だった。見かけは貧民、契約は拒否する、全く言うことを聞かない最低で最強の使い魔。彼の召喚がハルケギニア大陸とゼロのルイズの運命を大きく変えることを、今は神さえも知らない。

プロローグ

青年は、駆け上がった。彼の人生18年の間において、感じたことのないほどの焦燥感を抱えて。

青年は、駆け上がった。身にまとう鎧の重さも忘れ、蠟燭が揺らめく石畳の螺旋階段を。

階段を駆け上がると、青年の眼前には広い石畳の廊下が広がる。

青年の体力は限界を超えていたが、気力が彼を走らせた。彼が気に入らなかつた絵や花瓶の横を通るが、それはもはや気にならない。

やがて暗がりの中から巨大な木製の扉が姿を現し、彼は扉に体を打ち付けた。扉が激しく開いて、壁にぶつかり跳ね返る。脚がもつれ、転倒し、彼は顔に石畳の冷たさを感じた。

その心地よさに身を任せたかつたが、彼は最後の気力を振り絞り、ようやく頭を少し上げた。

「か、彼、ゴホッ！」

息がつまり、彼はせき込んだ。その伝えるべきことを伝えようと、口だけが空回りしている。

そこへ、彼と同様に鎧に身を包んだ者が二人両脇に駆け寄り、彼の上半身を起こしあげた。青年は息を整え、再度口を開く。

「彼の者が、現れました！」

周囲にどよめきが起こり、初めて青年はこの場に多くの人々が集まっていることに気がついた。鎧をまとう者、マントをはおっている者、宗教をにおわせる着物をまとう者、各々が独特の服装をしているが、そのみは共通していた。

彼らの表情は恐怖にひきつっていたのだ。

その者達の中から、一際目立つ二人の影が立ちあがった。

「それは誠か!？」

青年は今にも途切れそうな意識をかるうじて繋ぎとめ、二人の影を見やる。一人は赤いマントをはおった威厳のある老人で、立派な顎鬚を蓄えている。頭に黄金の冠をかぶり、ぼんやりとした青年の頭でも我が最後の王であることが分かった。

もう一人は、白い綺麗なドレスに身を包んだ気品漂う老女で、頭には銀の冠を載せている。ぼんやりとした青年の頭でも、我が最後の女王あることが分かった。

青年は義務感にかられ、動かない口を無理やり動かす。

「はい。間違いございません!」

周囲に再度どよめきが起き、青年は再度石畳へと倒れ伏した。最後の王は手を振りかざし、倒れた青年をかばうことなく、言い放った。

「全軍に、戦の準備をさせよ!」

青年の周りで、けたたましく金属こすれあう音とせわしない足音が起こる。青年はその様子を瞳に写し、自分の義務を果たした満足感を持って眼を閉じた。

昔、この世界には一つの大陸と9つの国があった。9つの国はそれぞれ強大な武力をもち、拮抗した武力は人々に平和をもたらした。人々は有り余った活力を文化へと注ぎこみ、有り余った魔法を生活に溶け込ませることでそれまでになかった繁栄を享受、謳歌してい

た。

だがそれは、今、たった一人の男によって滅亡の時を迎えていた。男の名は、バルス「タイラント」。

彼は、その絶大な魔力によって9つの国の内8つの国までを滅ぼした。人は老若男女を問わず殲滅され、彼の通った後には灰だけが残った。

そして今、彼は最後の人類15万人が立てこもるこの場所へとやってきた。

15万人の人々の中に、彼を人と呼ぶ者は一人もいない。人々は、彼を目してこう呼ぶ。

ディアブロ、魔王、邪神、一騎当神と

。

第一話 ゼロと邪神

草原の広がる小高い丘に、その男は立っていた。背には背丈を超える日本刀のような剣をさし、所々穴の開いた小汚い白のローブを頭からまとい、紫色の瞳だけを覗かせている。男はやがてその丘の一番頂上で腰をおろし、顔を隠していたローブをとった。青い髪がふわりと揺れ、ローブの下から姿を現す。腰にある袋をゴソゴソとやると、男はパンを取り出して口に運んだ。

彼、バルス「タイラントは未来を見ることができた。予測するのではない。実際に、見る事ができたのだ。」

そして、彼は見た。今日この日、彼の意識が途切れる瞬間を。彼の人生、18年の終焉を。

「つまらなかつたな」

誰にいうでもなく、彼はボソリとつぶやいた。

彼の人生は、その見ることのできる未来に支配されていた。何故か彼はその未来に逆らってはいけないような気がして、その見た未来と同じ事を喋り、同じことをしてきたのだ。

バルスにとって、8つの国を滅ぼすことも、呼吸のタイミングさえも同様のことでしかなかった。そして今、目の前の無数の灯火の下にいる15万の軍勢と戦うことも、石と山に護られた要塞を攻めることも。その中で、死ぬことですら。

「さて、はじめるか」

バルスは、定められた言葉を、定められたタイミングでつぶやく。定められたタイミングで立ち上がり、定められた場所へと、定められた歩調で歩き始めた。

一方で、未来の見えない者たちはそのバルスの姿を見て狼狽していた。15万人の軍勢とはいえ、その内容は殆どが一般人。正規の軍は、1万人にも満たない。

人類皆兵。武器も持てないような老人や幼い子供たちですら武器を持ち、バルスへとその切っ先を向ける。世界中から集められた名工の武具が全員に支給され、まさに人類の総力を結集した烏合の衆の軍だった。

その中から、一人の少年が歩み出た。

「あんな奴、僕がやつつけてやる！」

それは、幼少期に特有の言動だったかもしれないが、その薄っぺらい台詞とは裏腹に全軍の士気を上げることとなる。

「おお、そうだ！敵は一人だけだ！」

「子供に負けてはおれんぞ！」

「そうよ！私たちがだって、子供たちを守らなくては！」

大地に15万の雄たけびが上がり、士気は天を衝く。赤い旗が翻り、馬はいなき、大きな土ぼこりをあげて15万人は動き出す。その敵意はたった一人の人物へと向けられた。いや、人などではない、邪神に。

邪神は、紫色の瞳に巨大な砂塵を写すと静かに口を開いた。

「立て、ゴーレム」

邪神の周りに怪しい紫色の光が輝き、大気の中へと流れ出る。流れ出た光は、吸い込まれるように大地へと消えていった。やがて草

原が盛り上がり、無数の黒いそれが這い出てくる。

四角くごつごつした胴体に、腕は細いパイプが円計上につき、それは私たちの概念で言うガトリングガン。脚は鳥のような逆間接だが、野太くしつかりとしている。頭部は胴体と一体化しているらしく、胴体に光を放つライトのようなものが二つ付いており、それが眼の役割を果たしていた。口や鼻に当たるものは見当たらず、身体全体の質感から砂鉄でできているようだ。

無数の黒いそれを、バルスはゴーレムと呼んだ。

「殲滅せよ」

無数のゴーレムの腕が一齐にガチャリと金属音をあげ、安全装置を解除する。砂塵を上げて迫りくる15万の軍勢の先頭、馬にまたがるランスを構えた鉄騎兵へと銃口が定められた。

バリバリという音とともに銃口が火を噴き、無数の黒い弾丸が鉄騎兵を襲う。馬は嘶いて倒れ、同時にまたがっていた者たちもバタバタと地に伏した。無数の悲鳴が上がり、地に伏していく者の数だけが増えていく。

15万の軍の後方でその惨状を見ていた、赤いローブを纏った部隊。最後の魔法戦闘部隊7000名は、ゆっくりと前に進み始めた。

「我らを守護する者よ……」

「我が聖霊よ……」

各々が持つ守護の魔法の呪文を唱えると、突撃を続ける鉄騎兵の鎧が淡く白く輝き始める。ゴーレムの放つ黒い弾丸の雨は、その鎧によってはじかれた。倒されることのなくなった鉄騎兵は、ゴーレムに肉薄してランスを突き立てる。

だが、砂鉄でできたゴーレムの装甲は堅牢で、それを破れた者は一人としていなかった。

赤いローブの部隊が、更に魔法をかけようと試みる。

「我が盟約に…」

赤いローブを纏った者たちは、その途中で詠唱をやめてしまった。ゴーレムを貫く攻撃力をランスに与える呪文をかけようとしたのだが、正確にはやめさせられたのほう正しい。

彼らは、口を途中で開けたまま、体内に今まで感じたことのない熱いものを感じていた。そして、見開いた眼には、遠くにポツンと見える邪神の姿が映っていた。

邪神は赤いローブを纏った者たちに掌を向け、空気をなでるかのよう腕を動かす。

「フレイム・オブ・フレイム」

断末魔の間もなく、赤いローブの部隊は消え去った。7000の、灰の山だけを残して。

この魔法はバルスを邪神たらしめている魔法の一つで、敵と認識した者を物理的なものに左右されずに一瞬で焼き尽くすというものだ。フレイム・オブ・フレイムとゴーレムの魔法が、この世界のほとんどもを滅亡へと導いていた。

その滅びの魔法が赤いローブの部隊を消していく様を見た鉄騎兵は蹄をかえし、ある者が叫んだ。

「た、退却だ！」

それを皮切りに同様の声がかしこから聞こえ、15万の軍は散り散りになって逃げ惑う。多くの者が背後からゴーレムに襲われ、

バタバタと倒れた。それでもその場の全ての者が要塞の門を目指し、その顔に恐怖を孕みながら懸命に走る。それを眺めるバルスの眼には冷やかな感情のそれしかなく、眼の前に広がる死の平原を彼らとは対照的にゆっくりと歩いていた。

チリチリと焼ける肉の匂いに、血の生臭い匂い。やがてバルスは、折り重なった6体の騎士と見受けられる死体の山の前で立ち止まる。バルスはその光景を見てニヤリと微笑を浮かべると、再びゆっくりと歩き始めた。バルスは、彼の最後の時を前に、笑っていた。

さあ、これで最後だ。

騎士の死体の一つに脚をかけた瞬間、騎士の死体が揺れ動く。死体の山の中からは、顔をぐしゃぐしゃにして泣いている幼い少年が飛び出した。両手に槍をもち、切っ先がバルスの首へと向けられる。

「うわあああああ！」

少年の雄たけびは、彼の者を貫いた。かつて8つの国までを滅ぼし、人類を15万人にまで追い込んだ邪神を。その瞬間、少年は泣き、邪神は笑っていた。

広がる緑色の草原、美しい日の光、白い城壁ともいえる壁に囲まれた、白く美しい塔。ここはハルケギニア大陸トリステイン王国、トリステイン学院。メイジと呼ばれる魔法使いを養成する施設である。

その緑広がる学院の中庭では、生徒たちが集まりある行事が催されようとしていた。青いローブを纏って眼鏡を掛けた、頭の禿げた

細身の男を中心に、黒いマントにカッターシャツを着た者たちが囲っている。

頭の禿げた細身の男の名はコルベール。彼の周りに集まっているのは、その生徒たち。コルベールは口を開き、行事の名を告げた。

「静かに。これから、召喚の儀を執り行います」

その言葉を耳にし、多くの生徒たちは期待に胸を膨らませる。しかし、その中に憂鬱な感情を内包する者がいた。ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。桃色がかったブロンドの長髪と鶯色の瞳を持ち、体格は小柄で華奢だが中々の美少女である。そんな彼女が頭を悩ませるのは、この召喚の儀に切ってしまった大見栄だった。

ルイズは座学においてトップクラスの實力の持ち主であったが、魔法が大の苦手であった。事実、魔法が成功したことはなく、ゼロのルイズと称されるほどである。他の生徒たちはその魔法の特徴から二つ名を与えられていたが、ルイズだけは二つ名すら持っていなかった。

そんなルイズが切ってしまった大見栄とは、この召喚の儀において自分が一番素晴らしい使い魔を召喚するというものである。使い魔とはメイジが使役する魔物のことであるが、当然魔法にて呼び出される。一度も魔法の成功したことのないルイズにとって、一番素晴らしい使い魔どころか召喚できるかどうかすら怪しい。

その不安そうなルイズの顔を覗き込むように、耳打ちする者があった。

「楽しみにしてるわよ、ルイズ。あなたがどんなに凄い使い魔を召喚するのか」

燃えるような赤い髪と瞳、褐色の肌を持ち、高い身長とグラマラ

スな体格を持つモデルのような女性。キュルケ「アウグスタ」フレデリカ「フォン」アンハルツ「ツエルプスト」。二つ名は微熱。キュルケは、意地の悪くも美しい微笑みをルイズに見せつけた。ルイズも負けじとにらみ返す。

「ほつといて」

中庭で生徒が思い思いの場所へ散らばり、各々の思う呪文で次々と使い魔を召喚していく。一喜一憂の声上がり、中庭は喧騒に包まれた。

その喧騒は、クライマックスを迎えるとともにどよめきへと変わる。

「サラマンデル！最後に来て大物を召喚しましたね」

コルベールは、その尾から炎を噴くワニのようなトカゲのような生物をサラマンデルと呼んだ。サラマンデルとは火トカゲのことで、文字通り炎の系統魔法を操るトカゲである。

そのサラマンデルを召喚した褐色の美女は、誇らしげに答えた。

「私の二つ名、微熱のキュルケにふさわしい使い魔ですわ」

そのキュルケの姿を、苦々しくみるルイズ。ルイズには、あれ程の使い魔が自分の元に来てくれる自信がなかった。その不安感が、彼女を中庭で一人取り残した。

そんなルイズの心境を知るはずもなく、コルベールは無情にも告げる。

「えー、これで全員ですか？」

その言葉に、キュルケはいち早く反応する。

「いいえ。まだ、ミス・ヴァリエールが」

その言葉に押し出され、ルイズは生徒たちの輪の中心へと歩みだした。ルイズの不安はルイズを取り残し、一番オトリという立場へと追いやった。生徒たちの嘲笑的な笑みの中、ルイズは念じる。

お願い、来て。

ルイズは震える手を押さえ、強く己を信じて杖を握る。杖を天にかざし、ルイズは口を開いた。己の、未だ見ぬ使い魔を信じて。

「宇宙の果てのどこかにいる、私のしもべよ！」

ルイズの独自性のある呪文に、生徒たちはクスクスと笑い声を立てる。その残酷なまでの嘲笑を、ルイズは無視して呪文を続けた。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！私は、心より求め、訴えるわ！我が導きに、応えなさい！」

ルイズは大きく杖を振り、使い魔を召喚すべき地をさす。同時に、あたりは白い煙に覆われた。

爆発。この言葉がふさわしい。召喚術にも関わらず、ルイズの呪文は爆発を呼び起こした。

失敗？

その二文字が、ルイズの頭の中をぐるぐると回る。その白い煙の中に潜む者があることを信じ、ルイズは眼を凝らした。

邪神、バルス「タイラントは眼を開けた。眼の前には白い煙が広がり、顔には緑色の草が当たっている。ゆっくりと晴れていく煙の中、バルスは上半身を起こし、眼を凝らした。

俺は、死んだはず。地獄か？

だが、バルスの望んだ答えとは裏腹に、晴れた煙の先には顔をひきつらせた少女の顔があった。少女は顔をうつむき、肩を震わせ、こぶしを強く握る。少女の周りを囲う集団から、大きな笑い声がかき起こった。

「あれって、平民じゃない？」

「あの格好、間違いない」

「それも、貧民。乞食の類かしら？」

ルイズ自身、そう思った。ぼろぼろの布切れを纏った、小汚い男。自分の望んだ使い魔とは程遠い、己の使い魔。悔しくて、一度だけ涙が頬を伝うのが分かる。

一方で、バルスはその少女の涙を見逃さなかった。そして、周囲の嘲笑から召喚という単語が漏れ聞こえたのも。

召喚！？この俺を、召喚だと！？

8つの国、20億の民を尽く滅ぼした絶大なる魔力。その分厚い魔力に護られた自分を召喚した少女。バルスは、人生で初めて恐怖を感じた。その少女から感じる、己と対することのできるであろう魔力に。

少しの沈黙と延々と続く嘲笑の間、バルスは冷静さを取り戻し、己の異変に気がついた。

魔力を、感じない。

あれ程満ち溢れていた、バルスの魔力。それが、初めからなかったように消えうせている。

未来が、見えない。

バルスの行動を決めていた、見える未来。それが、見ることできかない。

バルスは、こぶしを高く上げた。上げずには、いられなかった。

「素晴らしいっ!!」

バルスを縛るものは、何もなかった。自分で自分の人生を決め、自分の意思を選択する権利を得たのだ。人が自由と呼ぶそれを、バルスはようやく手に入れた。今の彼にとって、少女の魔力などもはやどうでも良いものとなっていた。

その不自然にガッツポーズをとる貧民に背を向け、ルイズは言い放った。

「ミスターコルベール！」

「何だね？」

「もう一度召喚させてください！」

ルイズの言葉に、コルベールは首を横に振る。ルイズ自身、それは分かっていた。やり直しなど、効かないことを。この儀式はメイジの一生を左右する神聖な儀式であり、やり直しは禁止されているのだ。

ルイズは己の召喚した使い魔へと向き直り、覚悟を決めた。

「平民が、それも貧民が貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

それをしなければ、退学。ルイズにとってそれは許容できるものではなく、儀式の内容は何か許容できる内容であった。ルイズは前かがみとなり、地に座る小汚い男へと近づく。

「感謝なさい」

ルイズは眼を閉じ、小汚い男の口へと唇を近付ける。瞬間、男は立ち上がり、後ろへと飛びのいた。

「貴様、何のつもりだ!？」

少女の唇に魔力が集中し、それが何らかの束縛を伴う魔法であるとバルスは瞬時に見抜いた。この少女がどんなに強力な魔法使いであろうと、せつかく得た自由を手放すバルスではない。背に背負った剣のつかに手を伸ばす。

あれ?ない!?

バルスの手は空をきり、つかむべき愛刀、魔剣ムラマサをつかむに至らなかった。

ムラマサがあれば、まだ勝機はあった。20億の民を滅ぼしたのは彼の魔力であったが、彼の力はそれだけではない。剣技においてもそれは断トツに秀でており、剣士となれば一騎当千といっても過言ではなかった。だが、素手においてはそれほどでもないのだ。

「つ、使い魔のくせに、契約を拒否するの!？」

ただでさえ傷ついたルイズの自尊心が、更に傷つく。使い魔で、平民で、貧民のこの男の手によって。

「おっことわりだ!!」

バルスの一言に、周囲は大爆笑の渦に巻き込まれた。生徒たちが腹を抱え、苦しそうに笑い続けている。

「さっすがゼロのルイズ！期待を裏切らない！」

「使い魔に契約拒否されるなんて、おかしすぎ！」

この前例のない事態に、コルベールは頭を抱えた。普通、使い魔は人間ではないし、意志を持って契約拒否してくることはない。尋常ではないバルスの敵意の眼を見たコルベールは簡単に解決できる問題ではないと判断し、ルイズのそばへと歩みよる。

「焦ることはありません。時間はたくさんあるのですから、契約を急ぐ必要はないでしょう」

コルベールの助け船に乗りたかったルイズであったが、プライド

がそれを許さない。ルイズはそれをよしとせず、首を横に振る。

「ですが、それでは主人の威厳が」

「彼の眼を見なさい」

頭からかぶった白いローブから覗く顔に、宿った激しい敵意の黒い瞳。ルイズは息をのみ、うなずいた。

ルイズは、まだ知る由もない。自分の望んだ、神聖で、美しい、強力な使い魔。神聖ではない、美しくもないかもしれない。だが、これだけははっきりしている。世界最強の使い魔を、呼び出したことだけは。

手荒な親睦会

「あなた、名前は？」

その会話は、塔の一室で始まった。床は木造り、一つの木製円机が部屋の中央に置かれ、窓際にピンク色の豪華なベッド、壁際に豪華な鏡台とクローゼット。床に藁で作られたベッド。

その藁のベッドに座らされ、バルスは仁王立ちするルイズを見上げていた。

「名を尋ねるのなら、先にそちらから名乗れ」

バルスは、自分を見下す少女から視線をそらし、そつぽを向いた。鏡台が瞳にうつり、鏡台に自分の姿が映し出される。黒い髪に黒い瞳に戻った、自分の姿が。

バルスは、魔力を使用していないときは青い髪が黒となり、紫色の瞳も黒となる。青い髪も紫色の瞳も溢れだす魔力がそうさせるのであって、実際のバルスは黒髪に黒い瞳なのだ。

そのそつぽを向く小汚い男を見下し、ルイズは不本意ながらも応えた。

「私の名は、ルイズⅡフランソワズⅡルⅡブランⅡドⅡラⅡヴァリエールよ」

以外にも素直に答えたルイズに、バルスは自分の態度を少し恥ずかしく思った。そつぽを向けた顔を元に戻し、ルイズを見上げる。

「ルイズⅡフランソワズⅡルⅡブランⅡドⅡラⅡヴァリエールさんね」

「え!？」

ルイズは、ただ驚いた。できるだけ早口で名乗った自分のフルネームを、ただの一度で覚えてしまったこの男に。貴族でも、一度聞いただけで自分の名をフルネームで言えるものは少ない。

「俺の名は、バルス。タイラント。バルスと呼べ」

「私も、呼ぶときはルイズでいいわ」

無事自己紹介を終えたことで、ルイズは胸をなでおろす。敵意だけを向けられていた先ほどと比べれば、大きな進歩だ。

ルイズは鏡台の前に立ち、使い魔に次なる指令を出すためにそれをとった。それとは、男物のカッターシャツと黒いズボン。トリステイン魔法学院の、制服であった。それを己の使い魔の前に差し出し、受け取るように促す。

「とりあえず、お風呂に入ってきてなさい。話はそれからよ」

風呂から上がったバルスは、言われるがままにルイズに渡された服に着替え、ルイズの部屋へと戻ろうとしていた。

バルスは風呂に入る前から、ずっとルイズについて考えていた。

あれ程強力な魔力を持ちながら、それを行使しようとする気配がない。今の自分を従わせることなど、その魔力を用いれば簡単なことなのにもかかわらず。

それどころか、同じ魔法使いの仲間からバカにされている節があった。あの程度の者たちなど、ルイズの魔力に比べればゴミクス同然なのだ。ルイズが悔し涙を流す理由など、本来なら見当たらない。あいつ、魔法がコントロールできないのか？

その結論にはいとも容易くたどりついたが、風呂とルイズの部屋の距離がそれほど離れているわけでもないため、バルスは目的地に到着してしまっていた。ドアをノックし、ゆっくりとルイズの部屋へと入る。

中ではルイズがピンク色の寝巻に着替え、長い髪をといていた。話とやらがあるので自分を待っていたのだろうとバルスは推測するが、いかんせん、自分に向けられるルイズの視線がおかしい。

「あんた誰よ？」

ルイズの無愛想な声とジト目に、バルスはムツとする。先ほど挨拶を交わしたばかりだというのに、この小娘はもう自分の顔を忘れてしまったようだ。

「さっき風呂に入れと言ったのは、どこのどいつだ」

「へ？」

ルイズは髪をとくのをやめ、思わず立ち上がった。

「バルスなの？使い魔の？」

「契約してないから、使い魔じゃない」

端正な顔立ちの、少し優雅ささえ纏った男が、似つかわしくない藁のベッドへ腰を落ち着ける。先ほどまでの小汚い男とは少し違い、いや、変わり果てすぎて、ルイズはその男をすぐにバルスと判断できなかった。

自分の使い魔の変貌ぶりに、ルイズの心は少し軽くなる。バルスの今の姿を見て、ルイズのクラスメイトが今のルイズと同様に驚く様を思い浮かべて。

「で、話とは何だ？」

一向に話を切り出さないルイズに、バルスはそう尋ねた後一度大きな欠伸をした。眠そうに眼をこすり、早く寝かせるとアピールする。

そのバルスの眠そうな顔に、ルイズは手に持った布を投げつけた。

「ぶ。何だこれは？」

バルスは顔に張り付いた布を引きはがし、それが女性用のカットソーシャツとミニスカートであることが分かる。しかも、使用済みのものであると。

「それ、よろしく」

「は？」

女性用の使用済み衣服を渡され、それ、よろしく。バルスは古い記憶をたどり、それがどういう意味であるか計ろうと試みた。

古い記憶によると、選択肢は4つ。嗅ぐ、被る、着る、舐める。

それは昔バルスの悪友が吹き込んだ男のロマン？だったが、バルスはどれも間違っているような気がした。

だが、あえてバルスはその中から選択することを選んだ。衣服に鼻を近づける。ほんのりとあまい香りがして、物凄く嫌な予感があった。

何かが空をきるいい音を、バルスはほのかな香りの中で聞いていた。

「明日の朝までに、洗濯しておいて！」

後頭部に激痛が走り、バルスは藁のベッドへ倒れ伏す。自業自得という言葉がバルスの頭をよぎったが、やっとできるようになった選択に後悔はなかった。

しばし部屋を沈黙が支配し、チリチリと蝋燭の焼ける音だけが二人の耳をつく。やがてか細い声で沈黙を破ったのは、ルイズだった。

「それと、明日使い魔との親睦会があるの」

「親睦会？」

バルスのルイズに対する異常な敵意に対し、コルベールは一計を案じた。普通、使い魔との親睦会はお茶会程度のもので、安らぎの時を使い魔と過ごすことで親睦を深める。だが、得体のしれないバルスと不器用なルイズにそんなことをさせても、変に関係がこじれる可能性があった。

そこで、コルベールは生徒同士によるトーナメントを思いついた。無論先生による立会いの下怪我の無いように行うが、その共闘によりバルスとルイズに仲間意識を芽生えさせるのが狙いだ。それに加え、各自が己の使い魔の能力を正確により早く把握できるということもある。

平和主義者のコルベールにとって、それは大ばくちだった。

「そう。それで、使い魔と協力しての、実戦形式のトーナメントがあるの」

「へ？」

バルスは、顔を上げた。それはあらゆる生物がかなわないほど、めんどくさそうに。

「で、あなたは気に入らないかもしれないけど、私に協力してほしいの」

「やだ」

予想はしていたが、改めて言われるとルイズは怒りを抑えずにはいられなかった。肩がふるえ、こぶしを強く握り、我慢する。

明日のトーナメントは、ルイズにとって名誉挽回のチャンス。出場するからには、是が非でも1位をとりたい。無理とは分かっている、せめて、自分の使い魔が他の者たちの使い魔と比べて何ら遜色ないことを示したかった。

「何でもしてあげるから、協力してよ！」

バルスは、ビクリと身体を震わせて起き上った。ルイズの怒気を孕んだ声もそうだが、同時に声が震えていたからだ。バルスはルイズを見るが、うつむいていてその表情は読み取れない。

バルスはやれやれと横に首を振ると、静かに口を開いた。

「いいだろう」

「え！？」

希望に満ちたルイズの目が、バルスへと向けられる。バルスは、その目から目をそむけた。なんだか、これから出す自分の要求が意地の悪いもののような気がして。

「ただし、俺の剣を見つけてこられたらな」

バルスは、魔剣ムラマサについて事細かに説明する。身の丈を超える大刀であることや、鞘が深緑の光沢を出す黒いものであることなど。その説明を聞くルイズの眼は真剣そのもので、しきりにうなづいていた。

実際、バルスが素手で戦えば、普通の人並みの力しか出せない。ルイズに大恥をかかせるのは明白であり、バルスは大怪我をすることが明白だった。

だが、おそらく、ルイズはムラマサを探し出すことはできない。あの魔剣は、あっちの世界に置いてきた可能性が高いのだから。

バルスがムラマサの説明を終えると、ルイズはスツと立ち上がった。バルスの眼の前で臆面もなく寝巻から制服へと着替え、部屋の外へと走り出す。

「あなたは明日の朝中庭に来ること。いいわね!？」

ルイズはムラマサを見つけることに何の疑いもなく、廊下の闇へと消えていった。

一夜明け、バルスはルイズに指定されたとおりに中庭にいた。日が昇ってから二時間ほどして、キュルケと青い髪の子眼鏡をかけた小柄な少女が現れる。それまでバルスは一人、ただルイズを待っていた。

「あら？見かけない顔ね？どちら様？」

燃えるような赤い髪の美女、キュルケがバルスを見つけ、駆け寄る。その後ろから、青い髪の少女はゆっくりとした足取りでついてきていた。

バルスはうつむいていた顔を上げ、キュルケと目を合わせる。

「ルイズの使い魔候補」

ぼそりとそれだけをつぶやくと、バルスはまたうつむいた。キュルケはあっけにとられていたが、青い髪の少女が言葉足らずの言葉を補足する。

「ルイズが呼び出した、使い魔……」

「え！？昨日の貧民！？うそ！？」

間もなくして続々と生徒たちが集まり、バルスの周りには人だかりができていた。ルイズの思惑通り生徒たちは驚嘆するところとなったが、それを胸のすく思いで見ろべきルイズの姿が見当たらない。コルベールを含む教員も集まり始め、中庭の話題はトーナメントの優勝者予測へと移っていた。

「やっぱり、優勝候補はキュルケとタバサね」

そんな声が大勢を占める中、当然逆優勝候補の話題も盛り上がりを見せていた。その候補筆頭はゼロのルイズであるのだが、そのルイズの姿が中庭に見えないのもその話題に拍車をかけている。いわく、ゼロのルイズは逃げだしたと。

バルスはその話を聞いて少し不快感を感じていたが、ルイズを弁護する理由も見当たらないので放って置いていた。

やがて中庭の中央が騒がしくなり、教員を中心に生徒たちが集まる。今まさに、コルベールが一回戦の組み合わせを読み上げられている。バルスの瞳に、ルイズの姿は映らない。

「一回戦は、キュルケとフレイム対…」

優勝候補がいきなり指名されたとあって、中庭には緊張感が漂う。ほとんどの者が皆、自分が指名されないように祈っていた。

「ルイズとバルス」

微熱のキュルケとサラマンデルのフレイムが中庭の中央に残り、バルスと対峙する。他の生徒や教員は離れ、広い円陣を作った。まるで、闘いのリングであるかの如く。コルベールだけがバルスとキュルケ、フレイムの間を審判役として残った。

「ミス・ヴァリエールは？」

そのコルベールの問いかけに、バルスは首を横に振った。不戦敗。キュルケとバルスの脳裏に、その言葉だけがよぎる。コルベールはキュルケの腕をそつとつかみ、高らかに上げた。

「待って！」

中庭の一同は、その声のする方向へと振りかえる。バルスはその瞳に桃色の髪を認めると、微笑を見せた。

「私はここにいるわ！」

目にクマを作り、少し髪の毛が縮れた姿の、ボロボロのルイズがそこにはいた。手に何も持たないところを見ると、ムラマサはやはり見つけられなかったようだ。キュルケの前まで足早に歩き、バルスとともに対峙する。

そのルイズの腕を、バルスはつかんでとめた。

「棄権しろ」

その言葉が、ルイズの心を深く傷つけた。バルスに悪気はなかったのだが、ルイズにはその言葉が裏切り者の言葉に聞こえた。寝不足のせいもあったのだろうが、自分の努力を踏みにじるようなその言葉が許せなかったのだ。

こいつも、同じよ！

「ほつといて！」

ルイズの心を悲しみが支配し、やり場のない怒りをバルスに向ける。努力したのに報われない、だれも認めてくれない。私の心を分かってくれない。挙句ついたあだ名がゼロのルイズ。

もうたくさんよ！

コルベールの試合開始の音が、ルイズの頭に響く。魔法陣が起動し、円陣をつかさどる生徒たちの前面に光の壁が作られた。バルス

はその壁ぎりぎりのところで座り込み、ルイズの遠い背中をポーッとみている。

コルベールは、己の描いた計画とのあまりの違いに頭を抱えたが、既に時遅し。キュルケの炎の呪文、発火が文字通りに火を噴く。

試合開始5分を待たずして、ルイズは地に足をついた。手加減されているとはいえ、キュルケの魔法と寝不足が、ルイズの体力をみるみる奪っていく。

さすがに見かねたバルスが、ルイズの元へと駆け寄った。ルイズの腕を引っ張り上げ、肩を貸す。そして、バルスはまた言ってしまった。

「棄権しろ」

ルイズの身体がビクリと動き、バルスから懸命に離れようとする。バランスを崩し、バルスはルイズに引っ張られるように転倒した。

ルイズはもがき、また懸命に立ち上がるうとしている。

「貴族はね」

うつむいたルイズの口から、こぼれだす言葉。バルスはそれに鬼気迫るものを感じ、聞き入った。

「貴族はね、敵に背を見せないの。名誉を失うくらいなら、死んだ方がマシなんだから！」

バルスは、反射的にルイズの腕をつかんでいた。そうしなければならぬ気がしたからだ。

「離してよ！あなた、私のことが嫌いなんでしょ！？」

バルスに握られた腕を、振りほどこうとルイズは腕を振る。

「嫌いなら、私のことなんて放っておけばいいじゃない！」

いつの間にか、ルイズの頬から涙が伝っていた。そしていつの間にか、バルスとルイズの間に、緑色の光が差し込んでいた。

こいつ、喚びやがった…！

腕を振り続けるルイズをよそに、バルスはその光に魅入られたように見つめ続ける。ルイズは腕がフツと軽くなるのを感じ、続いてそれがバルスの腕が離れたからであることを理解した。そして、バルスの腕が、その光に飲み込まれている。

バルスはうつむき、つぶやいた。

「約束だ」

引き抜かれた腕につかまれたるは、身の丈を超える大刀。鞘は深緑の光沢を放つ、漆黒。その神秘的な光景に誰もが息をのみ、ルイズは涙を流すのも、拭くのも、隠すのも忘れて見入っていた。

バルスは立ち上がって背中に魔剣ムラマサをさし、ルイズに背を向ける。右腕を上げ、刀のつかに手をかけた。

キュルケもその光景に息をのんでいたが、バルスが刀に手をかけたことで我に返る。そして余裕の笑みをその顔に浮かべた。

「いいのかしら？それを抜けば、私も容赦しないわ」

そのキュルケの警告に、ルイズはハツとする。剣をしようと、所詮は平民。魔法を操る貴族に、平民はかなわない。ルイズは自分の名誉のことばかり考えていた自分に気が付き、その愚かさと危険性

気がついた。

このまま剣を抜けば、バルスはよくて大怪我、最悪殺されてしまう。愚かな、自分のせいだ。

ルイズはいてもたってもいられず、バルスの左腕に飛びついた。

「待つて！抜いてはだめよ！」

しかし、ルイズは一瞬躊躇した。それに続く、棄権するという言葉をお口にすることを。その一瞬の隙をつき、バルスが口を開く。

「あんたは、ゼロなんかじゃない」

「え？」

ルイズは己の心を見透かされたようで、胸が高鳴る。その鼓動が腕を伝ってバルスに伝わりそうに、ルイズは思わず手を離してしまった。

バルスはルイズに顔だけを向け、優しく笑いかける。

「よく見ておけ、あんたが何を召喚したのかを」

バルスは、ルイズの反応を見てルイズが存外悪い人間ではないことに気が付いていた。だから、素直に力を貸す気になっていた。

剣のつかに掛けられた腕が上がり、カチリという音とともに鞘から銀色の刀身が姿を現す。刀身は朝日を跳ね返し、誰の目にもバルスが刀を抜いたことを知らせた。

「何かっこつけてんのよ、バカーー！！」

ルイズの叫びもむなしく、バルスを巨大な炎の玉が襲う。先ほど

ルイズを攻撃した炎の魔法、発火よりも数倍の威力をもった炎の玉、ファイアボール。平民相手に少し気のどくに思ったが、キュルケは本気でファイアボールの呪文を放っていた。

死んじゃったなら、目覚めが悪そうね。

バルスに向かう炎の大きさを見て、キュルケは何となく後悔したが、その場の全員が、息をのむことになる。

「消えた!?!」

「嘘!?!」

その場の全員が消えるのを見たのは、キュルケが放った巨大なファイアボール。巨大な炎のあった場所は空気が焼け、塵気楼のようにユラユラと揺れている。バルスの腕は剣のつかにかけられたまま、微動だにしていない。

正確には、バルスは微動だにしていなわけではなかった。目にもとまらないほどの凄まじい剣撃が、キュルケの炎を切り裂いたのだ。

その剣撃をかるうじて捉えられたのは、眼鏡をかけた青い髪の少女とコルベールだけだった。

「逃げなさい!ミス・ツエルプストー!」

「え!?!」

コルベールの言葉に、キュルケは少し不快感を感じる。その言葉の真意も理解しがたく、まるで自分が負けるように聞こえるのだ。確かに何らかの作用でファイアボールは消えてしまったが、まだ

まだキュルケは全力を出していない。

キュルケは再び不敵な笑みを浮かべなおす。

「やるわよ、フレイム！」

「アオオ！」

フレイムとキュルケの魔力が混ざり合い、巨大な炎の玉を作り上げていく。ファイアーボールは二乗し、フレイムボールを超え、なおもその大きさをとどまる様子はない。

ルイズは大きくなっていく炎の玉を茫然と見ていたが、我に返るとともにバルスが殺されると確信した。コルベールへ向き、ルイズは叫ぶ。

「棄権す…！」

「フレイムボール！」

ルイズの決断より先に、キュルケの呪文が完成する。通常よりも大きめのフレイムボールが動き出し、キュルケの杖が指す方向へと急激に加速した。その炎の玉がバルスにぶつかると同時に、強烈な爆風が周辺を襲う。ルイズは思わず目をそらし、己の顔を腕でかばった。

ルイズと同様の行動をとったキュルケは、その手ごたえに己の勝利を確信していた。勝利の高揚感に、ふわりと身体が浮くのを感じる。

「えっ！？」

だが、キュルケの身体は本当に宙に浮いていた。キュルケは腰の

あたりに衝撃を感じ、続いて左目のすぐ横を銀色に輝く何かを通り過ぎるのを瞳に写す。

爆風によって巻き上げられた砂塵が晴れ、やがて何が起こったのかをその場の全員につきつける光景があらわとなった。

キュルケは仰向けで草むらに倒れ、その細い首の横には銀色の刃が拳ほどの長さを残して深々と突き刺さっている。剣を握ったバルスの顔が目の前にあり、その鬼気迫る瞳にキュルケはポソリと呟いた。

「…ま、まいりました…」

音を一切排した沈黙の中、バルスは魔剣ムラマサを地面から引き抜いて立ち上がり、目にもとまらぬ速さで鞘へと刀身を納める。カチリという納刀の音と同時に、コルベールが手を天に上げて高らかに宣言する。

「勝者、ルイズとバルス！」

その成り行きを静かに見守っていた生徒たちが沸き立った。

「すっげえー！」

「おいおい、ルイズが勝つちまったよ」

「あれ、本当にルイズが召喚した使い魔なのか!？」

魔法を使わず、剣一本でメイジをねじ伏せた使い魔に生徒たちが驚くのは当然だった。ドットクラスやラインクラスでもない、トライアングルクラスのメイジ、キュルケを剣一本でねじ伏せたのだ。それは、アリガドラゴンを倒すほどにあってはならないことなの

である。このトーナメント戦、ルイズとバルスのタッグはダークホースと呼ばれるのにふさわしい。

一方で、ルイズはこの勝利に喜びを感じることができていなかった。魔法の行使できない自分がキュルケに勝ったという現実感のない事実と、バルスへの心配がルイズの喜びを吹き飛ばしていたのだ。何しろ、ルイズはバルスを何もできないただの弱い平民だと思っていたのだ。バルスに協力するように言ったのは焦りから来る一種の気の迷いで、我に返ってからはずっとバルスが殺されないかと心配で仕方がなかった。

喧騒と注目を集めるバルスにルイズは駆け寄り、その心の内をぶちまけた。

「大丈夫！？怪我はないの!？」

よくやったとルイズに偉そうに褒められると思っていたバルスは、心配されて面食らった。そんなバルスを横目に、ルイズはバルスが怪我を隠していないかバルスの身体を見まわす。

だが、バルスが怪我をしているはずがなかった。フレイムボールが命中したときに起きた爆風は、実はバルスがフレイムボールを切り裂いた時の剣撃に由来するものだったのだ。バルスの一撃は完全にフレイムボールを両断しており、故にバルスはかすり傷一つ負っていないのであった。

そのことを知る由もないルイズは、バルスが怪我をしていないことに胸をなでおろす。

「…無茶して。バカなんだから。」

未だ続く生徒たちの喧騒の中、フィツと蹄を返し、ルイズはバルスに背を向けた。そのまま歩き始めるルイズの後姿に、バルスは語りかける。

「力を貸すのは、このトーナメントの間だけだ」

「わ、分かってるわ」

ルイズは、歩みを止めるでもなく、振り替えるでもなく、不機嫌そうに答えた。

「ルイズ。何者も、お前には指一本触れさせない」

一瞬、大きく胸が高鳴るのを感じ、ルイズは振りかえった。自己紹介を終えて以来、バルスは初めてルイズに対して名を呼んだのだ。つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441y/>

ゼロの使い魔～一騎当神～

2011年11月3日02時16分発行